

「東京タワーと月とあの人と」(広尾の掌編小説3)

十二月上旬ともなれば、肌をなでる空気は凜としていた。首に巻いていた^{えんじ}臙脂色のストールを整えて、七時前の空を見上げれば深い紺色だった。

その日の用事を終えてほっと息をもらすと、白くひろがって消えていった。

あの人職場も近いので待ち合わせて帰ろうかと連絡を入れたら、十五分ほどであがれると返事が来た。今日はいつもより早めに仕事が終わるのだろう。久しぶりに一緒に帰れると思うと少し心が浮き立った。

どこかお店で時間をつぶそうと広尾の街を歩いた。食事時とあって建ち並ぶ店はにぎやかな声とあたたかな照明の光があふれている。

〈船橋屋こよみ〉の角に差しかかると、数人が足を止めて何やらスマホのカメラを向けていた。



何だろうと振り向くと、落ちそうなほどの月が、朱色の東京タワーの左側に出ていた。

「広尾月だわ」

ささやくように声がこぼれた。

十六夜の月が東京タワーに寄り添うように、輝いている。そういえば今年最後の満月は昨日だったかしら。

年に数回しか、東京タワーのそばを通る月が見られないから、“広尾月”と街の人は呼んでいるらしい。いつだかあの人が教えてくれたのを思い出した。

あの人も早く来ないかしら、と急いでスマホをとり出す。

写真を撮って、『広尾月が見えるわ』とメッセージを送信した。既読はすぐにはつかない。仕事が長引いているのかな、と少し残念に思いつつ、幸せ色をした月と東京タワーを眺めた。

私と同じように足を止めて広尾月を見ていた初老の女性が、すごいですねえ、あたし広尾はじめて来たんですけど、こんなに素敵な街なんですね！ と、興奮した様子で話しかけてきた。

傍にいたご婦人も写真に残そうとスマホをかまえながら、東京タワーと大きな月なんて贅沢な景色ですね、と自然と話しに加わった。

この街の人は広尾月、と言っているみたいですよ、とあの人から聞いた話をした。

二人の女性は感心して、「令和元年最後の広尾月ですかね」と笑っていた。

そんな話しをしている間にも、月は東京タワーへと近づいていく。タワーの後ろに差しかかった時に、スマホが震えた。

『仕事終わった！すぐ行く』と返事が来た。

そしてさらに一言『月が綺麗ですね。』と返ってきて、ドキリとした。

——ああ、彼はこの表現に込められた意味を分かっている、あえてこの言葉を送ってきたのだろう。不意打ちで送ってくるは、なんとも、ずるい。

思わず頬がゆるむのを抑えることもできずに彼が来るのを待った。

月の中心と、東京タワーの中心が、ぴったりと重なった。人だかりは一人二人と増え、感嘆するような声があちこちで上がっていた。



一緒に見たかったなあもう来るはずなのだけど、と思っていたら聞きなれた声が降ってきた。

「お、ちょうど、ど真んなか」

隣を見ると、コートに身を包んだ彼がいつの間にか立っていた。目が合って「お疲れさん」と笑う。

「間に合ったのね！」

と自分でも驚くほど嬉しさが声に乗ってしまって、すこし恥ずかしくなった。

「もちろん」と答えた彼がそのあと小声で「一緒に見たくて急いだ」と言ったのを、ちゃんと聞き逃さなかった。私はたまらず「ふふっ」と笑みをこぼした。

直接は『月が綺麗ですね。』を言えない彼が、ぎこちなく私の手にぎった。

完

作 天風 凜 (あまかぜ りん)